

「水研だより」100号発行によせて

水産研究課長 船越 進

Key word; 水産業のアーカイブ, 最近の研究, これからの研究

「水研だより」の1号は1990年(平成2年)の6月に発行され(当時は「水試だより」)、今回の発行をもって100号を迎えることとなりました。

第1号発行以来26年、1/4世紀にわたって、本県の漁業・魚介類・海洋環境などに関する話題を漁業者並びに県民の皆様に発信して参りました。

「水研だより」は水産研究課の事業報告と並んで徳島県の水産業のアーカイブとして重要な役割をもっています。話題の多くは、その時代や時期の研究に関するものが中心となっており、「水研だより」を見ればその時代・時期に課題となっていたテーマや漁業界のようすがうかがえます。

また、研究に関することだけでなく、調査や研究中に採集されたり、県民の方々から持ち込まれた珍しい水産動植物の話題や水産研究課職員の研究への意気込み、水産生物や漁業への思いなども盛り込まれております。

「水研だより」の第1号に水産研究課(当時は「水産試験場」)の行う研究について、当時の水産試験場長が、「・・・本県の水産振興上必要な各種の試験研究及び調査業務に取り組み、その時代に即した試験研究機関としての役割を果たしてきた。そしてこれからも・・・(略)・・・地域に密着したテーマを選定し、より計画的・組織的に各種の調査業務に取り組み・・・(略)・・・」と書いておられます。

また、「水研だより」につきましても「・・・水産試験場で行っている業務の内容、あるいは得られた成果の概要・・・等をわかりやすく提供し・・・。」と書かれております。現在の水産研究課が行う研究、そして「水研だより」のいずれもが当時の水産試験場長が言われたとおりで、これからも発行当初の理念を踏襲して参りたいと思っております。

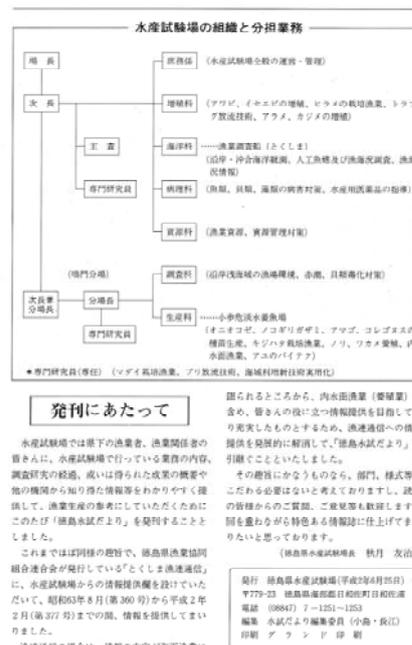


写真1. 1990年6月に発行された水試だより第1号

最近の研究について、少し触れてみたいと思います。

まず、海水温の上昇に関しての話題です。

水産研究課では昭和40年代から40年以上にわたり、調査船「とくしま」によって、本県の播磨灘沿岸から紀伊水道・太平洋沿岸において海洋観測を続けております。

その観測結果から、海水の温度が40年の間に大きく変動しながらも平均で1.1℃～1.3℃上昇していることが判りました。

暖水を好むハモやアジアカエビの漁獲が以前よりも増えたり、あるいは逆に冷水を好むアワビ、カレイ類、イカナゴなどの魚介類の漁獲量が減っていたり、「水研だより」でも紹介しました亜熱帯に生息する魚が捕れたりするのも海水温上昇の影響かなと思っております。

さらに、本県の代表的なブランド水産物であるワカメも海水温上昇の影響で秋の「種付け」がうまくいかない状況がここ3年ほど続いております。

水産研究課ではこれに対応するため、「高水温耐性」の「ワカメ種苗」の開発を始め、平成27年に完成したところです。現在この種苗の普及を図っているところです。

ワカメの他、本県が全国一の生産を誇るスジアオノリについても「高水温耐性」の品種開発研究を進めているところです。

次に、最近、特に昨年あたりから「瀬戸内海環境保全特別措置法」の改正に伴って話題となっている「海水中の栄養塩」の問題です。

栄養塩は、水産物、特に養殖の「ノリ・ワカメ」にとってなくてはならないもので、栄養塩が少ないと「ノリ・ワカメ」の色が退色する「色落ち」という現象を起こし、製品の価値が下がってしまいます。

この「色落ち」はここ2～3年のものではなく、平成11年ごろから報告されており、平成14年9月発行の「水研だより」第47号でも紹介しております。

栄養塩の調査もかなり以前から実施しており、結果は即座に漁業者にお伝えしているところです。

調査の他、栄養塩の減少や増加を予測できる手法を現在開発しているところです。

この他、赤潮、養殖魚の病気への対応、漁具の開発研究など、多くの課題に取り組んでいるところです。

最後に、水産研究課のこれからの研究の方向ですが、これまでに行ってきた現場のニーズに即応した研究、海洋観測・赤潮調査・栄養塩調査など地道ではありますが、研究の基礎であり、欠かすことの出来ない調査・研究については今後も継続して参ります。

これらに加え、今後は、現在の調査・研究から得られた結果から導かれる現象に対応する必要があるのではと思っております。

例えば、「水研だより」でも紹介した、本県ではほとんど見られない珍しい「南方系」の魚が獲れた。この原因は、海水温の上昇によるものであった。これまでであれば、海水温上昇の結果、獲れていた魚が捕れなくなった、あるいは藻場が消えた、これを回復するための方法等を研究していましたが、これからは、海水温上昇に伴って増えてくるであろう「珍しい魚」についての研究、生態・漁獲方法・利用（流通・加工）などを調査し、本県漁業にとって価値があるかないかを見極める研究が必要ではないかと思っております。

相手が大自然のことですから、何が起こるか予測は難しいとは思いますが、これからは徳島県漁業の振興のため、関係機関と連携しながら様々な取り組みをしていきたいと思っております。

また、これらの取り組みを「水研だより」で皆様にお伝えし、皆様からのご質問・ご意見をいただき、「研究」も「水研だより」もより良いものにしていきたいと思っております。

